

今、我々は不安と混乱の時代を生きているように思える。今までの日本では考えられなかったような事件がたて続けに起きるからではない。むしろそれは、その不安の原因とする結果なのではないか。「建て前」といわれるものであれ、とりあえず日本人が行動の規範としてきたものの考え方が通用しなくなりつつあることへの不安であり、それに由来する混乱である。かといって我々は新たな規範を創ろうという気構えや意思を失ないかけているのではないか。そう感じるのは、僕が少し疲れ気味のせいだからなのだと思います。

そもそも人々の振る舞いがひどく利根的であり、さもなくばあらゆることを指示されるままに、あるいは機械的に反応するしかない、奴隷かロボットになりたがっている日本人ばかりが増えてきているかのようにみえるからだ（いつだってそうだったのかもしれないが）。そのくせその時その時の我欲のままに振舞い、言葉を発つするおれについては、露ほども問うことがない。

しかもそれが、高い見識を持ち社会的責任を負う（ものと思われてきた）、人々の範となるべき（はずの）人々においてもう笑い話のようにアカラサマであったりもしてしまふ。

権力者の悪徳などというものはいつの時代にだってあるし、それを質す「正義」の糾弾者への無責任な大衆の喝采も、また世の常であった。

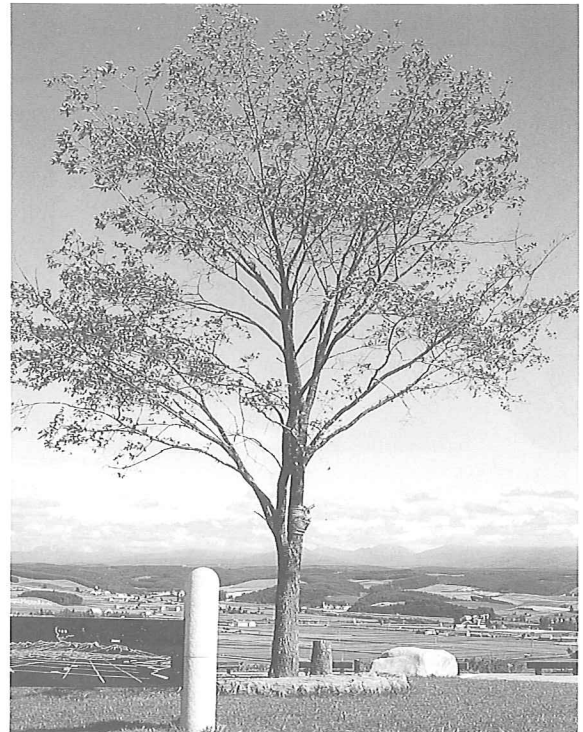
しかし、現代の不幸とは、悪徳であれなんであれ、何等かの未来や夢を描くことのできる指導者を見出せなくなっ

とことん私利私欲であればこそ

江刺しの稲

第10回 本誌編集長 昆 吉則

「江刺しの稲」とは用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。全く管理されないこの稲が、手をかけかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺しの稲」の存在は我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。



しまったこと。また一方では「正義」を語る人々の、おれを問わず天に向かつて唾する言葉の空しさ、滑稽さに、そろそろ人々が白々しいものを感じ始めていることだ。

そしてそんな社会システムへの人々の不信感が、ある限界を超えてしまうのではないかと思える時代になってきたということではないだろうか。

災難にあわれた方々のことをこんな所で引合いに出すのは不謹慎かもしれないが、兵庫の震災の際に名もなき市民や商店の小母さんたちの振る舞いによって、庶民の中にある「人倫」とでもいうべきものに触れ、多くの人があれほどに感動し、逆に、むしろ何か救われた様な感情を持ったのは、単に同情だけからではなく、時代状況のひどさの裏返しだったのかもしれない。

それは、法律や制度や契約などとい

たもの以前に、むしろその前提となっている、もっと素朴な人々の「わきまえ」がいかにか社会にとって価値あるものであるかを、あらためて確認したからなのではないだろうか。

誤解されそうない方だが、人は頭ではなく、胃袋や手足の筋肉で考えるようなこと、をもう少し大事にすべきなのではないか。人が経験のなかで振る舞い方として選んできたこと、それも僕や父の世代というより、祖父や曾祖父が何を考え、どう振る舞ってきたのかをもっと学ばなければならぬのではないだろうか。

それは多分、頭だけで考えた「正義」や「善意」や「良心」によってではなく、むしろ食べ過ぎれば腹をこわすおれの胃袋で哲学し、振舞いを選ぶ智恵だったのではないのだろうか。いわばトコトン私利私欲であればこそ、目先の小さな欲を越え、時代の同伴者、そして共に生き、伝えるべき未来のために働くことではなかったのだろうか。そのために自らを問いつけたらいい。他人を問うても答はないのだ。でなければ、不安に駆られた原理主義者のテロリズムに世の中が蹂躪されかねない時代なのだ。

しかし、現在をどれほど暗く認識しようとも、我々は常に明るく未来を夢見る態度を捨てたくない。以前、ある老農から「明日死ぬのだから今日も今日は堆肥をまくというのが百姓の生き方なのだ」と教えていただいたことがある。僕も、今日がどれ程の土砂降りの雨であったとしても、明日が「晴れたらいいね」と歌いながら未来のために堆肥をまく自分でありたい。